

英語自由選択科目

「英語同時通訳法」

鳥飼 玖美子

「英語同時通訳法」は全カリ英語自由選択科目のひとつである。週2回の授業で前後期合わせて4単位。他の目的別英語科目と異なり、半期だけでは成果が上がらないことから、前期に合格した者のみが後期を履修することになっている。

全カリ開始時からこの科目を担当し1999年現在3年目となるが、当初は、専門科目ではなく全カリ英語科目ということから、特に通訳者養成をめざすのではなく、「通訳技法を用いた英語上級クラス」と位置付けてシラバスを用意した。シャドーイング shadowing という同時通訳の基礎訓練を通して英語の音声感覚を身につける、日本語から英語への逐次通訳を通しての発信型英語力の育成をはかる、英語から日本語への通訳をすることにより、枝葉末節を捨て要点をつかむ力を養う等々、通訳訓練を英語教育に応用する授業を考えた。この基本方針は現在も変わっていないのだが、実際に授業をしてみて、少々予想外だったことがある。

履修学生が期待以上の能力と意欲を見せてくれている点である。話しを聞

いてみると、アルバイトで通訳を経験したり、将来の希望として通訳者を考えている学生もいることがわかってきた。そうなると教える側もだんだん欲が出てくる。これだけ力があり、やる気のある学生なら、実地訓練をする機会があれば、更に能力が伸びるだろう、学んだことを生かして挑戦する場が欲しい、と考えるようになっていた。

そのような折、立教大学ウイリアムズ主教記念基金により、カナダからカウンセリングで知られるマクベイン博士が招へいされ学内で何回か講演会が開催されることになった。ジェンダーフォーラムでも講演が決まり、所長の庄司洋子社会学部教授から通訳についてご相談を受けた際、私は学生の起用を提案してみた。私自身が必ず同席し万が一の場合は助け船を出すことを条件に、ぜひ学生にチャンスを与えて欲しい、とお願いをしたところ、庄司先生は快諾して下さった。

ジェンダーフォーラムでのマクベイン博士の講演テーマは「夫の暴力による精神的外傷を持つ妻たちへの精神的配慮」。授業で、通訳ボランティアを

募ったところ、即座に5名の学生が手をあげた。

法学部3年の三重綾子さんがチーフとなり、文学部英米文学科3年の神山美保さん、工藤由紀子さん、佐藤彰子さん、経済学部2年の羽方康恵さんの5名がチームとなった。

この通訳チームは11月の本番まで熱心に自主勉強を続けた。参考文献を図書館や書店やインターネットで探して読み、ジェンダーフォーラム主催の庄司先生による同じテーマの事前研究会にも参加。おおづめになると毎週のように授業後、昼食を共にしながら講演内容について、通訳のノウハウについて勉強し、必須用語集も各自作成した。たとえば“domestic violence”という英語をどのような日本語に訳すと最適なのか、議論もかなりした。

本番1週間前の授業では、担当教員がマクベイン博士に扮し講演のシミュレーションを試みた。ところが肝心の5名が緊張のあまりか、クラスメートも心配するくらいの惨憺たる通訳ぶり。教えている方も教えられている方も相当ショックであった。

しかし、本番前日は別のテーマで行なわれたマクベイン博士の講演を見学し博士の話し方や人柄に触れ、会場にもある程度慣れて、いよいよ当日を迎えた。

2名ずつ組になり、一人が通訳をしている間、残りの一人はメモを取り、つまったり間違えたりしたらすぐに助ける、ということにし、およその分担も決めた為、比較的スムーズにチームワークがとれた。講演自体は逐次通訳

が主体であったが、講演終了後の質疑応答では、会場から出た日本語の質問をマクベイン博士の耳元でささやくwhispering通訳をした。機械を使用しない日本語から英語への同時通訳と言って良い。全員、1週間前の授業での惨めな出来映えが信じられないような落ち着きで、5名とも自分の担当分の通訳を誰に頼ることもなく自力でなしとげたのは立派であった。「少々自信がなくても慌てず、語尾の最後まではっきり訳すこと」という注意を誰もが守り、途中で助けを求める学生も出なかったし、語尾を濁すことが一度もなかったのは特筆すべきであろう。

無論、多少の誤りはあったが、初めての経験とは思えないほどの堂々たる通訳ぶりであり、教室で学んだことのすべてを本番で生かした様子は、学生の無限の可能性を見事に示していた。

通訳を終えた後の学生から「通訳が、こんなに創造的な仕事だというのが、実際にやってみて初めてわかりました」という一言が出た時、授業中に言葉を尽くしてもなかなか理解してもらえないことを、この1回の通訳経験から学生が確実に学んでくれたことがよくわかった。通訳者志望でない学生にとっても、必死に勉強したことが実を結んだ、その達成感は何にも代え難い貴重な体験となったであろうし、通訳という仕事を通して、言語と文化について新たな知見を得たことの意味は大きいであろう。

(とりかい くみこ 本学観光学部教授
全カリ運営センター英語教育研究室主任)